豊見城市内の小字名ヤンガチの周辺について―名嘉地（なかち）、長堂（ながどう）の事例から―

井口　学

はじめに

筆者は『豊見城市史 第2巻 民俗編』の名嘉地を執筆担当した際に、名嘉地南側にある屋無垣原（ヤンガチバル）との小字（こあざ）[1]の語源として、久米島町仲地の溜池の事例[2]を踏まえて、「水路に引く水を安定的に確保するため川の上流部につくる溜池をヤンガーチ（ヤンガ池）[3]とよんだといい（中略）屋無垣原の語源も、かつてはこうした溜池があったことに由来するものかもしれない」と指摘した[4]。また当時、同民俗編の担当をしていた儀間淳一（ぎまじゅんいち）氏から、長堂（ながどう）にも山垣原（ヤンガチバル）との地名があるとのご教示をいただいていた。

ただ、溜池が屋無垣原に実際あったのか、さらにはそうした池がつくられた理由や背景については、課題として残されたままであった。

豊見城市史民俗編が刊行されて 14 年が経ち、この間に豊見城市以外の地域でヤンガーチと思われる地形やヤンガーとの名称を持つ石組の湧水の存在を知り、断片的ながらも関連する事項を意識してきた。そして今回の執筆を機に、これらと向き合うことになった。

本論では、名嘉地の屋無垣原、長堂の山垣原（図 1）にて、ヤンガーチの痕跡があるかを、航空写真や地図等を用いて検討し、今後に豊見城市内外でこうした池を調査研究するに向けてどのような視点が必要かの展望を述べるものである。

（1） 名嘉地

名嘉地は豊見城市の北西部に位置し、北側は那覇市と接する。

名嘉地は集落の北側になだらかな丘が東西に延び、その斜面に集落が立地する。そして集落の南側に平地が広がり、そこが屋無垣原となる。

筆者が名嘉地の民俗調査に従事した 2005（平成 17）年当時に、屋無垣原に池があったかを意識的に聞いてきたが、大正生まれの方々からは確認できず、これは 2022（令和 4）年の聞き書きも同様である。

ヤンガーチの名称は確認できないながらも、名嘉地北側にて小川の途中で池を確認できた場所がある。

隣接する那覇市宇栄原の男性（1931（昭和 6）年生まれ）によると、名嘉地北側の丘の中腹側にて、戦前に小川の真ん中にかつてミズガーグヮーと呼ばれるため池があったとの証言を得ている（図 2）[5]。ただし、この池のことをヤンガーチと呼ぶわけではなく、この池名そのものについてもわからないとのことであった。

---

[1] 小字とは、字よりもさらに狭い市町村の小区画のことで、集落の一部や農耕地等の利用地の小域を指す。『角川日本地名大辞典 47 沖縄』（「角川日本地名大辞典」編纂委員会、1986 年発行、角川書店）、p13

[2]「琉球列島水田立地論―序説として―」、『伊礼伊森原遺跡―嘉手納（7）貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告―』（北谷町文化財調査報告書 第 18 集）、（中鉢良護著、1998 年発行、北谷町教育委員会）、pp26～29

[3] 以下ではヤンガーチと表記する。

[4]「名嘉地の民俗」、『豊見城市史 第 2 巻 民俗編』（井口学著、2008 年発刊、豊見城市役所）、p119

[5] 2005（平成 17）年 4 月 27 日の調査による。なお図２は、国土地理院ホームページから、1970（昭和 45）年 5 月 12 日「ＭＯＫ701－Ｃ14－19」（国土地理院）の航空写真を加工したものである。
https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=l1933&isDetail=true）（閲覧日：2022（令和４年）3 月 31 日）

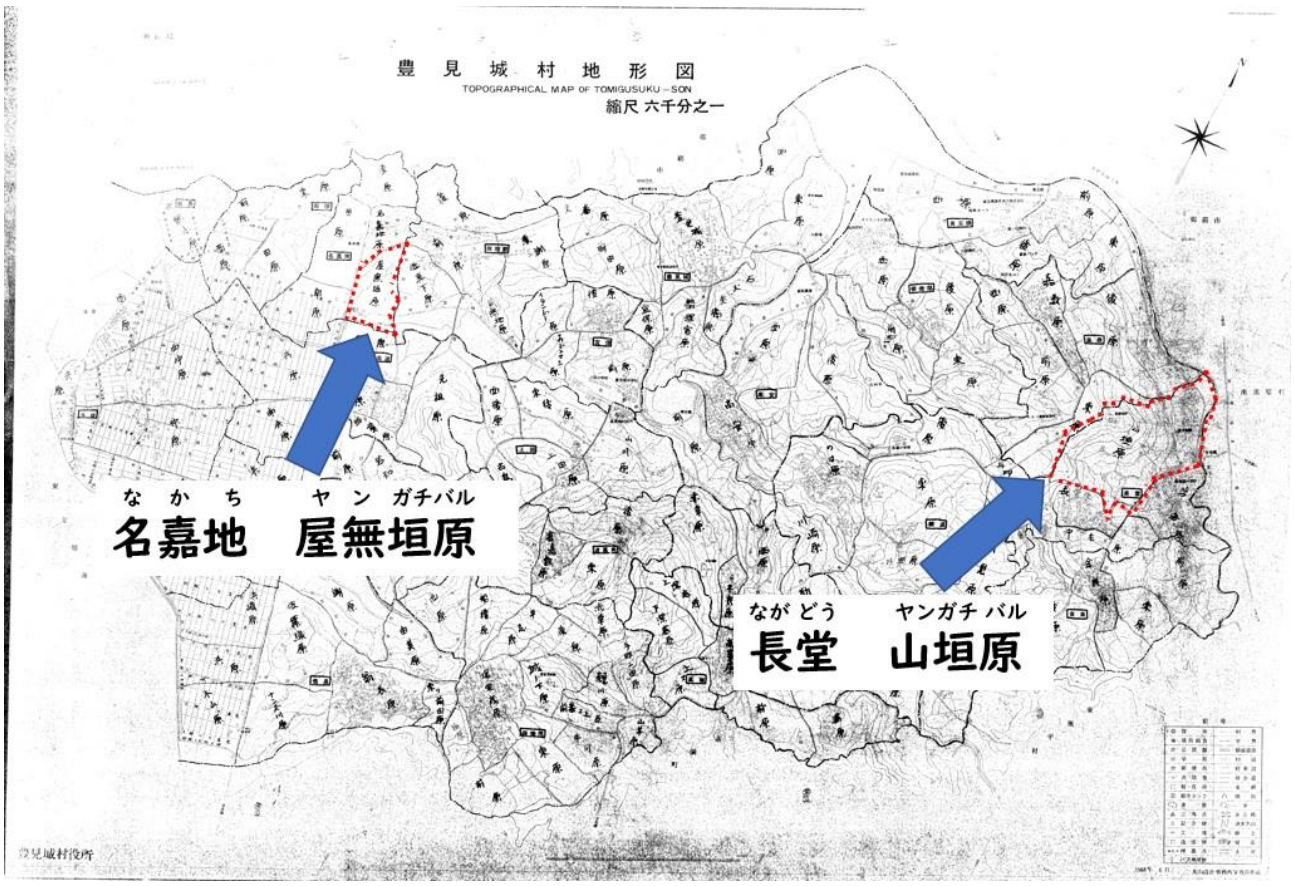

図 1　名嘉地の屋無垣原、長堂の山垣原、位置図

① ミズガーグヮー（名嘉地北側）

図 2[6]で引用した 1970（昭和 45）年 5 月 12 日の航空写真に証言を照合させると、池そのものは残っていないがその東側の外縁が小川として残ったことが確認できる[7]。前出男性の生年を踏まえると、少なくとも昭和 10 年代まで池が残ったことになろう。

この形態からミズガーグヮーがヤンガーチだとすれば、小川の先は名嘉地と田頭（たがみ）の境目を流れて、田頭の水田地帯に通じるので、この水田へ水を安定供給させるためのものであったと想像できる。

もちろん小川の流れによる形成の可能性を視野に入れつつ、このような蛇行した小川をモデルにして考えると、他の地域において蛇行

図 2 名嘉地北側拡大図

[6] 1970（昭和 45）年 5 月 12 日「MOK701-C14-19」（国土地理院）より作成

[7] 後述する「米軍作成 1948、1948 年彩色標高図」にも、ミズガーグヮーと根神田らしきものが水路沿いに小さく見える。

を描く水路にヤンガーチがあった可能性も示せるのではないか。

このミズガーグヮーの下流域については、重要なトピックが2点ある。

1つ目は、ミズガーグヮーのすぐ近くの下流沿いに、名嘉地の根神田（ニーガンダー）が存在したことである。根神田では、門中と村人がそろって田植式をおこない、その後でないと各自の田植えはできなかったという。さらに「五月の稲穂祭」（※五月ウマチー）の際には、この田でできた稲穂3筋を根屋（ニーヤ）（越地（クィージ）門中の神屋であろう）のヒヌカン（火ヌ神）に供えてから祭祀がはじまったとのことである[8]。ヤンガ―チによる安定供給された水と、名嘉地のウマチーで重要な根神田との関係も気になるところである。

北東側からミズガーグヮー付近を臨む
奥の左側へ流れる水路に、池の曲線の名残がある
2022（令和4）年筆者撮影

2つ目は、琉球王国のあった時期（近世期）の田頭における経済的疲弊とその対策で実施された水田開墾の存在で、ミズガーグヮーの溜池開発が田頭の水田開墾とつながる可能性である。

『球陽（きゅうよう）』によると、1804（尚灝（しょうこう）[9]元）年に名嘉地からの湧水と地面を流れる雨水を引いてよい田にし、苗代を他の村に頼らずにすむまでになったとある[10]。そして、田頭で苗代（田植えできる大きさになるまで稲を育てる水田）を育てていたのは、那覇市高良との境になる山の斜面の棚田であったという[11]。苗代を他村に頼らずに済む状況、つまり苗代を自村で育てられる場の確立と、かつての苗代を育てた棚田の水源が名嘉地北側の小川に近接すること、以上を踏まえると、後述するように1796（嘉慶（かけい）元年）から1802年（嘉慶7年）にかけての開発とその後の一環として、名嘉地北側の小川にヤンガーチがつくられた可能性がある。

② 屋無垣原

名嘉地の南側に位置する小字の屋無垣原だが、管見で確認できる航空写真ではヤンガーチらしきものは確認できないが、「米軍作成1948、1948年彩色標高図」[12]には、東側の我那覇一帯から、四角状の形を複数描くように流れる水路の途中に、ヤンガーチと思われるものが、矢印と点線の丸で表記した5カ所で確認できる（図3）。

そのうち屋無垣原内に3カ所、その東側の我那覇の佐真下原（サマシタバル）側に1カ所、水路の下流となる名嘉地の南ヌ原（ヘーバル）に1カ所となる。

我那覇から流れるこれらの水路の水の先は、田頭南側の水田地帯となるが、この地帯への水量の安定供給を目指したことになろうか。実際、田頭の南側の水田地帯は小禄の高良や我那覇の流水が流れる湿

---

8 『温故知新』（長嶺正徳著、1983年発行、同刊）、pp137～138

9 年号の表記は、原則として原史料の表記に従った。

10 「名嘉地の民俗」、前掲書、pp122～123

11 「田頭の民俗」、『豊見城市史 第２巻 民俗編』（瑞慶覧峰子著、2008年発行、豊見城市役所）、p155　なお戦前期の田頭における稲作では、シマーと呼ばれる在来種で旧暦2月に田植えをする一期作の品種であったといい、1940（昭和15）年頃に二期作ができる台中六十五号との品種が導入されたとのことである。またどの品種の頃かは不明だが、市場で売られた田頭の米は美味しいとの評判であったという（「田頭の民俗」、前掲書、p155）。

12 「米軍作成1948、1948年彩色標高図」の存在については、島袋幸司氏の御教示による。

地帯で、稲作に適していたが、大雨が降るとすぐに川が氾濫して水浸しになったという[13]。それを踏まえると、ヤンガーチらしき池の多さは、水田へ供給される水の不安定さの裏返しなのかもしれない。

『球陽』によると、1796（尚温2）年から6年間かけて、田頭村とその近郊諸村の人々が3,460 坪の水田を開墾したとある[14]。ここでいう水田が田頭南側の水田地帯だとすれば、開墾の一環として、これらの池が名嘉地で作られたとなろう。

図 3 名嘉地屋無垣原周辺図(1948 年)

③ 小括

名嘉地において、ヤンガーチと思われる池は、小字名となる屋無垣原のみにあるわけではなく、その周辺の北側や東側にも存在することが確認できる。屋無垣原の小字名はあくまでも、こうした池が複数あるがゆえであろう。

東側から西側へ流れる小川や水路がその先の田頭の稲作地帯と流れるなかで、名嘉地はその流れの通過点となり、池による水量を安定させる地理的な位置づけがあったとなろうか。とはいえ、名嘉地の根神田がこうした池の下流にあった事実は、名嘉地に対する水利の恩恵との側面はあるのではとの想像もはたらく。

『球陽』の記述をそのまま踏まえれば、まず 1796（尚温 2）年から 1801（尚温 7）年に屋無垣原とその周辺に池がつくられ、その次の 1804（尚灝元）年に、名嘉地北側にミズガーグヮーの池がつくられたとなる。

これらは田頭での水田開墾をめぐる諸開発とその名嘉地への影響の動向といえるだろう。

戦後の開発があったとはいえ、1948～1949（昭和 23～24）年当時のこうした池の風景を大正期生まれの方々が覚えていない状況は、これらの池が当初の用途を果たさなくなったことの現れではないだろうか。

---

[13]「田頭の民俗」、前掲書、p154

[14]『豊見城村史 第９巻 文献資料編』（豊見城村教育委員会村史編纂室著、1998 年発刊、豊見城村役所）、pp174～177

屋無垣原南側から北側を臨む
（2022（令和 4）年　筆者撮影）

屋無垣原中央付近から北西側を臨む
（宮城右勲資料　文化課所蔵）

（２）長堂

長堂は豊見城市東部に位置し、那覇市仲井真（なかいま）と南風原町津嘉山（つかざん）に接する。

長嶺グスクを含む丘が東側へカーブを描きながら北側へ延び、その丘の東側では長堂川が南北へと流れる。これらの丘と長堂川の間に集落が位置する。

そして集落北側にて、丘の東側斜面一帯と長堂川にはさまれた平地、これらの一帯が山垣原となる（図 4）。

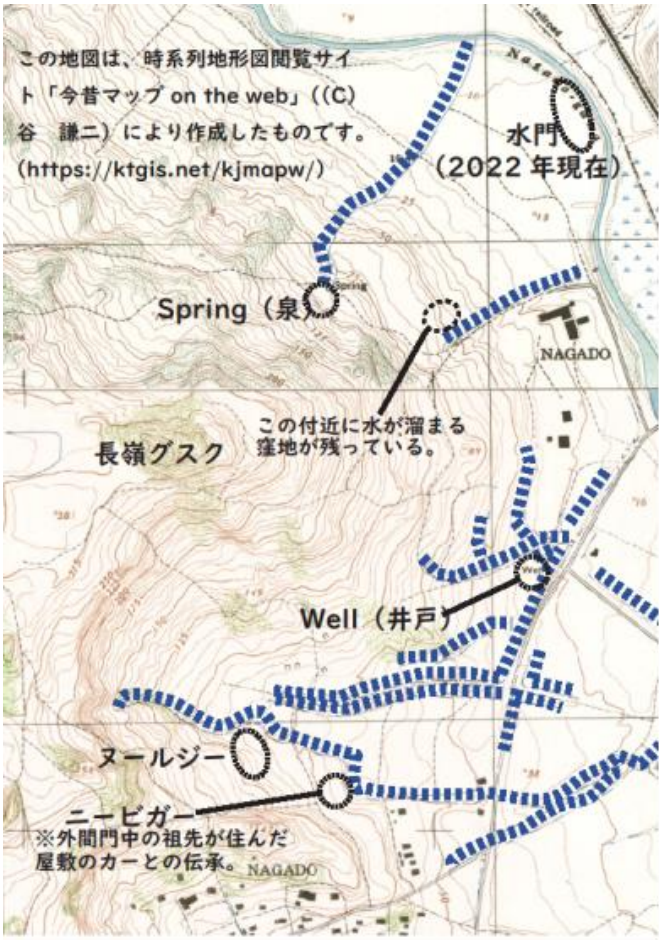

図 4 長堂山垣原周辺図（1948 年）

① 池と小川、水路のあり方について

山垣原にて、地図や航空写真からヤンガーチと思われるものは明確に確認できない。この背景には、1916（大正 5）年に沖台製糖の工場設置により、大正から昭和初期にかけて水田の多くがキビ畑になったこと[15]も大きいかもしれない。

ただ西側の丘から流れる水が、東側の平野部に流れていることは確かで、「米軍作成 1948、1948 年彩色標高図」等からは小川もしくは水路が確認できる。

以下ではヤンガーチを視野に入れたうえでこれらを検討していく。

② 集落北側（山垣原南側）

水路が明確に確認できる地域である。西側の丘の谷間から東側へと流れる水路が、畑地を横断する。

[15] 「長堂の民俗」、『豊見城市史 第２巻 民俗編』（稲福政斉著、2008 年発刊、豊見城市役所）、p698,p704

山垣原北東側から南西側を臨む
村内航空写真より編集
1996（平成 8）年 2 月撮影　文化課所蔵

山垣原南西側から北東側を臨む
村内航空写真より編集
1996（平成 8）年 2 月撮影　文化課所蔵

もし前述の名嘉地北側のミズガーグヮーをモデルにすれば、水路のカーブあたりに池があったことを想定したいところだが、水路のカーブ付近であっても、外間門中の祖先が住んだ屋敷のカーとの伝承があるニービガーや王府からノロが賜ったとされるヌールジー[16]付近に、池を設置できるものかは判断に慎重を要する。さらに水路の上流部にそうした池があったのかも、課題として残る。

北東側から山垣原を臨む。手前に水門が見える
2022（令和 4）年　筆者撮影

現時点で確認できるのは、この地域が小字山垣原の範囲内とのことのみである。

③ 丘の東側斜面一帯（山垣原北側）

図 4 を見ると、丘の東側斜面から複数の流れが小川となって流れていたことがわかる。池があったことを想定すれば、小川のどこかにあったとなるだろうか。

実際、山垣原北側の旧琉球製糖工場跡地の向かい側にあたる丘の中腹で、畑を営む男性（本部町出身で那覇市に移住された方）によると、畑のすぐ北側に丘の上部から水が流れる溝とその水が溜まる窪みがあるという[17]。

1976（昭和 51）年の住宅地図には、前述の窪みのすぐ南側に池があるのが確認できる[18]。これは「米軍作成 1948、1948 年彩色標高図」で確認できず、その後に新しく作られたもののようだが、少なくとも丘の中腹に水を貯めることのできる環境なのは確認できよう。

2022（令和 4）年 3 月現在、山垣原北側の丘の東側斜面とその麓側では、物流関係施設の建設による開発が進行中である。

---

[16]「長堂の民俗」、前掲書、p707,p718

[17] 2022（令和 4）年聞き書き。「米軍作成 1948、1948 年彩色標高図」にある水路に近接した場所なので、証言にある溝はこの水路かもしれない。

[18]『ゼンリンの住宅地図 豊見城村南風原村東風平村』（善隣出版社沖縄支社著、1976 年発刊、同刊）、p21　引用中のページは豊見城村内のものである。なお現在は池が埋め立てられ、現地にある会社の駐車場となっている。

④ 小括

長堂では、戦前期に農業がキビ栽培に大きく転換したこともあってか、ヤンガーチの痕跡を探すのは、名嘉地以上に厳しいものがある。

そのなかで水路並びに丘から流れる小川の周辺、そして丘の中腹にて池ができる程に水を貯めることのできる環境、それぞれに注目する余地がある。

ただ長堂にて稲作を考えるのであれば、長堂川からの水利を含めての検討が必要となる[19]。長堂の環境は、西側の丘から流れる水と、東側の長堂川からの水利の両方を見据えた環境で、他地域における小字名ヤンガチもしくはヤンガーチ、ヤンガーの樋を考える場との提起ができるのではないか。

ただ長堂での方言調査において、「水をはなれたところからひいてくるこういうもの」（樋（ひ））を方言で「ti :」と呼ぶとあり[20]、山垣原の「チ」は池ではない可能性もある。もしこの「チ」が池ではなく、樋（ち）だとすれば、ヤンガーの樋となり、1948（昭和 23）年時点の地図にて、池が明確に確認できないのもあり得ることになる。

まとめ

これまで名嘉地と長堂の小字名ヤンガチを取り上げてみてきた。これらの記述を踏まえて、その特徴や指摘できる点を以下にあげたい。

① 水流のあり方

池の痕跡が確認できるか否かの相違はあるが、丘といった高所から流れる小川や水路が通る地域との共通点がある。

② ヤンガーチの「チ」について

ヤンガーチの「チ」が池との用例は久米島町仲地にあり[21]、名嘉地の屋無垣原も同様に池の可能性がある。ただこの「チ」は、水を通す樋を指す可能性にも注意を要する。

③ ヤンガーの名称について

ヤンガーとの名称については、うるま市与那城字上原にて、丘の中腹に位置する集落上部からの湧水とそれを通す石組の樋（とい）をヤンガーと呼ぶのは注目である。なお『球陽』には 1849（尚泰（しょうたい）2 年に設置された石組の樋（とい）について、その設置以前に関して「上原村南方の岩下に、原、屋武川有り、両村の百姓、専ら此の泉に頼りて以て汲用を為す」とあり[22]、ここでのヤンガー（屋武川）は山からの湧き水との意味に

---

[19]「河川利用の水田」については、①水路を作らずに川から田へ水を引く場合と、②水路から水を田に引くものがあるという。①は多くの場合は川底が低いので、川に堤をつくって水位をあげるが、川の増水時には堤は決壊するため作り直す。②は川の用水を広く利用でき、より広い範囲に灌漑できる（『羽地大川修補日記』（名護市史・資料編 5 文献資料集 1）、（名護市教育委員会文化課市史編さん係著、2003 年発刊、名護市役所）pp12～13 長堂における河川利用については②であろうか、詳細の検討が必要となる。なお、かつて饒波川（のはがわ）の水を取水するために、高安地内の高入端（たかのは）橋と尚敬（しょうけい）橋（『豊見城村史』では早瑞橋とあるが現在の橋名を採用した）付近、饒波地内の 2 カ所に水が深く溜まっている場所（潭（たん））が昔からあったといい（『豊見城村史』（豊見城村史編纂委員会金城盛兼著、1965 年発刊）p762）、こうした潭のあり方を検討するうえで、「河川利用の水田」の実態は、必要な視座となる。

[20]『昭和 63 年度 琉球列島の言語の記録・保存事業 7 豊見城村長堂(ながどう) 全集落調査票』（沖縄言語研センター言語地理学定例研究会著、1989 年発刊、沖縄言語センター）ページなし 証言者は 1904（明治 37）年 10 月 10 日生まれの男性となる。方言研究に関して筆者は門外漢のため、この部分については専門家のご教示を待ちたい。

[21] 小川は久米島町仲地の事例にて、『球陽』に出てくる「山垣塘井」の「山垣」の方音は「ヤンガチ（キ）」であろうとし、「ヤンガチ＝イチ（山垣池）」の転化が現在のヤンガーチの現称であるとしている（「久米島民俗社会の基盤 水田造営形態と集落移動の関係について」、『沖縄久米島「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』（小川徹著、1982 年発刊、弘文堂）、p269

[22]『琉球の水の文化誌』（長嶺操著、1998 年発刊、沖縄村落史研究所）、p12～15,p22

なろう。これを踏まえると、ヤンガーは山からの水との意味合いになるのではないか[23]。

④ 歴史的な背景

小字名ヤンガチにあるのがヤンガーチとすれば、その建設の歴史的な背景として、少なくとも名嘉地と田頭では、『球陽』の記述から、1796（尚温 2）年から 1804（尚灝元）年にかけて実施された、田頭村での水田開墾とそれに向けての名嘉地での水路開発があげられる。豊見城間切内と他地域の水利関係の開発を以下の表 1[24]にあげておく。

うるま市与那城字上原　ヤンガーの全景
（2022（令和 4）年　筆者撮影）

水田に関する水利関係の開発に関して、全体的な動向をあげれば、元号が乾隆（けんりゅう）になった 1736（乾隆元）年から沖縄島内での河川改修の動きが活発になり、1737（乾隆 2）年の高安川の改修を含め、1743（乾隆 8）年にかけて様々な河川改修工事があったことが家譜等から確認できる[25]。この河川改修工事より 40 年程前に、久米島では 1697（康熙（こうき）36）年から 1777（乾隆 42）年にかけて、ヤンガーチを含む一連の池溝の開発があったことを家譜等から小川は指摘している[26]。後の 1849（尚泰（しょうたい）2）年には、うるま市与那城字上原における屋武川（ヤンガー）にて、石組の樋設置と田への水利の開発となる。

豊見城間切内の水利関係の開発では、初期の真玉橋（まだんばし）や高安の河川改修を除くと、1788（尚穆（しょうぼく）37）年から 1850（尚泰 3）年にかけて、保栄茂（びん）、翁長（おなが）、豊見城間切内（「十九個村」か）、田頭、名嘉地、嘉数、高嶺付近（兼城間切武富村後原（かねぐすくまぎりたけとみ））と開発が進められたことが確認できる。

ただそのなかでも田頭の開発は 6 年間かけた後に、名嘉地からの水を引く開発がされており、豊見城間切内の開発の中でも比較的大規模なものであったことは指摘できる。さらにこの開発に関連するものと思われる水路もあり、時期は不明だが、平良の轟泉（とどうるちがー）の余り水を引いて、旧 7 号線道路の上方（豊見城十字路南側）から上田の旧豊見城村役場の裏側を通って志茂田（しもた）平野（現在の田頭、瀬長、与根一帯）に流れる灌漑用水路があり、これを水道路（しいどうみち）と呼んだという[27]。この水路も同時期の事業の一環として作られたとの想像もできるだろう。さらに言うと「米軍作成 1948、1948 年彩色標高図」では、この水路と思われるもののなかに、旧豊見城村役場の南西側にヤンガーチらしき池が確認できる。

豊見城間切内でヤンガーチの開発が、田頭、名嘉地以前のものにあったかは定かではないが、少なくとも田頭の大規模な開発のなかで、ヤンガーチが登場する向きはうかがえよう。さらにいえば、琉球王

---

[23] なおうるま市与那城字上原のヤンガーにて、池があるとの話は近隣の方から聞くことはできなかった（2022（令和 4）年聞き書き）。

[24] この表の年代は基本的に史料に明記された年代であり、断りのない限り、年代が実際の事業時期というわけではない。
出典については、高安は毛氏家譜（勝連家）（『羽地大川修補日記』（名護市史・資料編 5　文献資料集 1）、前掲書、p27）より。それ以外の豊見城間切内全てとうるま市与那城字上原は『球陽』の記載からとなり、豊見城間切関係の記述は基本的に『豊見城村史 第９巻文献資料編』に依ったが、筆者でまとめ直した部分がある。なお名嘉地は拙稿（「名嘉地の民俗」、前掲書、pp121～122）に依る。久米島（池溝記事）は、小川徹の論考（「久米島民俗社会の基盤 水田造営形態と集落移動の関係について」、『沖縄久米「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』、前掲書、pp253～257）に依る。

[25]『羽地大川修補日記』（名護市史・資料編 5 文献資料集 1）、前掲書、pp27～29　なお参考にした表「乾隆年間初期の河川改修」は「比嘉史氏作成の表を一部補った」ものである（『羽地寄留士族関連資料』（名護市史・資料編 5 文献資料集 2）（名護市教育員委員会市史編さん係著、2004 年発行、名護市役所）、奥付）。

[26]「久米島民俗社会の基盤　水田造営形態と集落移動の関係について」、『沖縄久米島「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』、前掲書、pp253～257

[27]『豊見城村史』、前掲書、pp761～762　なお同書によると、1888 年（明治 21）年の甘蔗作制限廃止以降にサトウキビが重要視されるなかで、米作が衰えたために、この水道も忘れ去られ、水路を考案し築造した人も不明だという。それでも明治期末期までは水路に水がよく流れ、水田に幾多の利益をもたらしたとある。

国のあった時期（近世期）にまとまった地域の水田化が求められるなか、各地で地形や水利に根差した様々なタイプの水田が現れるなかに（久米島のような）「溜め池＋溝の方式による水田の拡大」があり[28]、豊見城間切内のヤンガーチと思われる池は、こうした久米島の水田開発の流れを汲むものといえよう。

（3）展望

ヤンガーチ並びに小字名ヤンガチの実態とその背景の追究に向けて、展望を以下にあげたい。

① 池の確認と曲線を描く小川の把握

まず豊見城市内外でヤンガーチと思わる池やその地形の把握である。

決して多くはないがヤンガーチと思われるものが実在し、実際に沖縄市池原の北部にて住宅地図から確認できる[29]。なお筆者が沖縄市史民俗編執筆に従事した際に現地を確認したが、米軍基地の敷地内で直接入れず、フェンス越しに目視したが雑草が生い茂っており、池の形態は確認が困難であった。やはり現在の米軍基地内にて、こうした池がそのまま残っている可能性があり、米軍基地内調査や返還後の開発前の調査の際には、注目すべきものである。

また「米軍作成 1948、1948 年彩色標高図」の田頭と伊良波にて、池から水路が伸びている個所があり、前出の沖縄市池原北側の住宅地図でも同様の池が確認できる[30]。水路の上流部に設置するヤンガーチとは若干異なるが、貯水と水の安定的な供給との点では同様の役割を持つものであろう。周辺から流れる水を集めて受ける池を想像するところだが、現場の確認が必須となる。こうした池への注目も必要である。

もちろん開発によって従来の地形がない場合も少なくなく、その際にはかつての地形を記録した航空写真や地図による探索と検討が必要となる。そのなかで蛇行を描く小川や水路への注目も手段の一つであるが、ここでは河川工学を踏まえて、自然発生的にできる河川の流れとは異なるものを導き出す視点が必要となろう。

地形が確認できなくても、今回の拙稿のように、小字名といった地名への注目から掘り下げるのも一つの手段である。

時期	内容	地域名
1708（尚貞 40）年	真玉橋の両岸に田畑を作られ、そのため洪水で橋や堤防が壊れるため、両岸の田畑を撤去させて、もとからの堤防を補修して石の橋を架けた。	真玉橋
1737（乾隆 2）年	向慎憲が高安川の改修を担当する。	高安
1788（尚穆 37）年～1789（尚穆 38）年	2年間かけて、保栄茂の鞍間志（ヒマシ）原から翁長南の喜雨川（キウカワ）原まで、長さ815間、幅3～4尺、5～6尺の溝を開き、宅地に水が流れずかつ田の被害もなく、川原一帯の畑4,060坪を水田にした。	保栄茂・翁長
1791（尚穆 40）年	我那覇村の前地頭代座安親雲上（サキノジトゥデーザアベーチン）によって、３つの水路を掘って田に水を引き、干ばつ時の心配がなくなり、米が増産され、苗床も確保する。	豊見城間切内（「十九個村」か）
1796（尚温 2）年～1801（尚温 7）年	6年間かけて、田頭村とその近郊諸村の人々が3,460坪の水田を開墾する。	田頭
1804（尚灝 元）年	名嘉地からの湧水と地面を流れる雨水を田頭に引く。	名嘉地
1831（尚灝 28）年	嘉数村内の加加才原（かかさい）原、味佐志保（みさしぼ）原、那加免襠（なかみね）原、川多（かあた）原、保加伊（ほかい）原の旱田が湿地で生産が難しいなか、改良工事を行って収穫高が上がる。	嘉数
1850（尚泰 3）年	水が枯れやすい田に、溜池（「水塘」）と溝をつくって泉からの水を引く。その際の溜池づくりの費用負担者に豊見城間切の百姓が1人あり。	兼城間切武富村後原（高嶺と接する）

（表１）豊見城間切における水利関係の開発

[28]「琉球列島水田立地論―序説として―」、『伊礼伊森原遺跡―嘉手納（7）貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告―』（北谷町文化財調査報告書　第 18 集）、前掲書、p62

[29]『ゼンリン住宅地図　沖縄県沖縄市』（ゼンリン著、2021 年発刊、同刊）、p8

[30] 同上

② 水田への注目

久米島の事例が示すように、水田地帯に水を供給する水路や小川の上流部への注目も必要である。

さらにいえば、苗代用の田や稲作の祭祀で重要な役目を果たす根神田に流れる小川や水路にて、その上流部に、ヤンガーチの痕跡はないかとの仮説も立てられる。

③ 伝承、行事への注目

地域における河川工事の伝承さらにはその工事に携わった祖先の伝承に、聞き書きで遭遇することがある。こうした伝承が確認できる地域の池や水路、小川に注目することも必要である。

特に上記であげた近世期の河川改修を踏まえると、同時期に村落移動が文献や伝承で確認できる地域では、より注目すべきである。

また小川によると、久米島の旧具志川村では、明治以前には村落行事として、溝の管理や渇水時の水管理に関連する、溝祭との行事が7月（旧暦であろう）におこなっていたという[31]。『豊見城市史 第2巻民俗編』でこの行事は確認できないが、旧暦の7月に溝関係の祭祀があった地域が、他にあるのかは気になるところである。

④ 文献史料の精査

小川徹の調査研究でなされたように、『球陽』や家譜等の文献史料にて、水利関係の開発が確認できる地域に、ヤンガーチがあるのではとの仮説を立てることができる。さらに、小川の論考[32]や『球陽』で度々出てくる「塘」との用語が、現地の実態を踏まえたうえで重要なものとなる。

もちろん文献史料にある工事関係者の追究も残っており、ヤンガーチに関連する地域との関係や前述の祖先伝承との検討も必要となろう。

おわりに

以上の展望であげた方法で様々な断片を収集したうえで、それらを組み合わせてヤンガーチとその周辺を見出すとの方法が、遠回りながらもその実態に近づく方法である。

豊見城市史民俗編の名嘉地を筆者が担当した際に、久米島町仲地や沖縄市山内の事例を通して、名嘉地の小字名や拝所名の由来を知るきっかけとなった経験があり、他地域の事例を幅広く見ておく必要性を痛感した。この経験を受けて、本稿では、名嘉地と長堂の小字名ヤンガチを掘り下げつつ、市内外の同様の事例へ踏み込む足掛かりを目指した意図もある。

いずれにしても個々の事例の追究とその比較検討を積み重ねるしかないが、その成果が固まっていけば、琉球王国のあった時期（近世期）の水利開発の諸相だけでなく、豊見城市内外の相互理解につながっていくのもまた確かである。

（参考文献）

・『歴史は景観から読み解ける―はじめての歴史地理学』（上杉和央著、2020年発刊、ベレ出版）

・「今昔マップ旧版地形図タイル画像配信・閲覧サービス」の開発」、『GIS-理論と応用』25（1）（谷謙二著、2017年発刊）

・『川はどうしてできるのか　地形のミステリーツアーへようこそ』（藤岡換太郎著、2019年発刊、講談社）※初版は2014年発刊。

[31]「久米島民俗社会の基盤 水田造営形態と集落移動の関係について」、『沖縄久米島「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』、前掲書、p255　なお小川の論考ではこの記述の出典として1951年に具志川村が発刊した『具志川村史』をあげているが、この年に発刊された『具志川村史』は、沖縄県立図書館並びに国立国会図書館で所蔵が確認できない。久米島博物館にも問い合わせたが、確認できないとのことであった。ちなみに1976年発刊の『具志川村史』では、溝祭に関する記述はない。

[32]「久米島民俗社会の基盤 水田造営形態と集落移動の関係について」、『沖縄久米島「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』、前掲書